

「図書館を拠点とした日本語の読み書き能力を高める 教育プログラム」の開発

板垣俊一、角張慶子、坂口 淳、曾根英行、
植木信一、渋谷義彦、田中 景、鶴巻悦子

The Japanese Literacy Education Program Based at Library at Niigata Women's
College: Development of the Program in 2005 and 2006

Shunichi ITAGAKI, Keiko KAKUBARI, Jun SAKAGUCHI, Hideyuki SONE, Shinichi UEKI,
Yosihiko SHIBUYA, Kei TANAKA, Etsuko TSURUMAKI

緒言

平成10年から12年にかけて文部科学省メディア教育開発センターの小野博らが行った大学生の日本語語彙力テストによれば、対象とした12の私立大学の学生の約7%、また6短期大学・専門学校の20%近くの学生の語彙力が中学生レベルだったという(小野他、2003)。小野によれば、それは日本型AO入試の結果であるという。語彙力の低下はその後さらに続き、私立大学および短期大学においては深刻な問題となっている(小野、2006)。

本学の場合でも、推薦入試制度によって全体の30%の学生が学力試験を受けずに入学してくる。また、ある学科では国語と英語とが二者択一の選択科目になっているため、さらにこの数値に若干の上積みをしなければならない。本学では日本語の能力調査は行なわれていない。現段階では、語彙力が中学生レベルという学生はごく少数だと思われる。しかし倍率が1倍前後に低迷しているある学科では、近年の学力低下を嘆いて推薦入試に日本語の小論文を課すに至っていることなどから見て、18歳人口の減少による大学全入時代を迎え、本学においても状況は予断を許さなくなってきている。

本学の学生における日本語語彙力は実際どうであろうか。昨年12月、授業科目「日本語教育演習」の受講者に次のようなアンケートを行ってみた。対象者は英文学科と国際教養学科の1年生である。①～⑩の設問語彙は、多少難しいかも知れないが、人文・社会系の講義で教師が使用する可能性のある語彙を私見によって選んだものである。レベルは高校3年生から大学生にかけてと見ていいのではないか。語彙の選択が適切かどうかは今後の検討に委ねたい。今回、これらの語彙を、(1)ほぼ理解している、(2)何となく理解している、(3)1つは理解している、(4)全く理解できない、の4つの選択肢から選んで回答してもらった。また学習意欲度を知るため(5)語彙の意味を詳しく知りたいかという問も設けた。結果は表1の通りであった。

短期間の実施だったので、本当に理解しているか記述によって厳密に確かめることはしなかったが、結果はこのように出た。⑦⑧⑨については全く理解できないという数値が高くなっているけれども、これらの語彙は大学の授業の中で学生に確認し教授していくべきものが多いから、必ずしも大学の講義を理解する前提となるものではない。同じ調査を1週間後に英文学

国際教養学科、幼児教育学科、生活科学科生活科学専攻、生活科学科食物栄養専攻、生活科学科生活福祉専攻、英文学科、国際教養学科、図書館司書

表1 語彙の理解認識および学習意欲 (人)

設問語彙	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
①主観と客観	21	1	1	0	1
②標準と基準	7	16	0	0	5
③感性と理性	8	11	2	2	6
④国家と社会	4	14	4	1	10
⑤近代と現代	4	13	5	1	10
⑥権威と権力	5	11	5	2	5
⑦概念と観念	1	10	4	8	11
⑧演繹と帰納	2	3	3	15	14
⑨寓話と挿話	1	2	8	12	19
⑩蓋然と必然	0	0	20	3	21

註1) 回答者は実施当日出席した23人
 註2) ⑥が比較的上位に来ていて、
 かつ学習意欲が低くなっているのは、
 国際教養学科の全員が課題として
 すでに学習しているからである。

表2 「ほぼ・なんとなく理解している」割合(%)

	1年生	2年生
①	95.6	100
②	100	86.8
③	82.6	97.4
④	78.3	84.2
⑤	73.9	86.8
⑥	69.5	60.5
⑦	47.8	44.7
⑧	21.7	28.9
⑨	13.0	26.3
⑩	0.0	2.6

科2年生の授業科目「日本語文化論」の受講生38人に行なってみたが、これらを比較すれば表2のようになる。数値は、それぞれ(1)ほぼ理解している、(2)何となく理解している、の回答数の割合(%)である。

1年間在籍しても大きな変化が見られない点は多少落胆させられる。しかも、⑤の「近代と現代」について自信がないという学生がいることを考えれば、本学でもリメディアルすなわち補習的な教育が必要かも知れない。この結果か

らは細かな能力は分からないが、少なくとも学習動機的前提となる(5)の意欲度を見ると、分からない語彙ほど学びたいという傾向が現れていることは頼もしいかぎりである。

本学の図書館委員会が、「図書館を拠点とした日本語の読み書き能力を高める教育プログラム(以下略称「図書館教育プログラム」)」の開発に取り組むきっかけになった要因の一つは、学生の書くレポートの拙劣さにあった。とりわけインターネットのサーチエンジンを使ったWeb検索によって一次的にヒットした記事を、内容の吟味もせずそのまま貼り付けるだけの目に余るレポートが最近増えている。この現象の裏には、資料を探せない、本を読まない、小論文の書き方が分からない、といった問題がある。これらのうち、とりわけ資料を探すことは、大学図書館の役割と密接に関わる問題である。今、大学図書館には教室における教員の授業と密接に結び付いた教育的機能の在り方があらためて問われている。ネット社会の情報の氾濫は、Web検索によってとりあえずヒットした記事を自分のレポートに貼り付けるだけという安易で幼稚な情報の選択をもたらしている。これに対して、信頼できる質の高い、かつ個別の学習課題に有効な情報の入手方法を指導すべき大学の機関は図書館である。なぜなら「どのようなネットワーク資源が信頼できるものであるか」ということの情報は、まさに図書館のみが自信をもって提供できる性質のもの」(土屋、2005)だからである。学術的な情報を中心に扱う図書館が中心となった情報検索リテラシー教育の必要性は昨今次第に高まっている。全学を対象に、資料の検索指導、積極的な読書への誘導、そして小論文の指導を通して、情報検索リテラシーの向上と、日本語の読み書き能力を高めることを目的に試みられている本プログラムは、大学図書館の新しい役割の模索と呼応した取り組みなのである。

このようなプログラムの開発を通して、われわれが願っていることは、図書館が学生の「自学自習の拠点」として活用されることである。学生に対してわれわれ教員はいつも「大学は知識を教えるところではない。自ら学ぶところだ。教員はその学び方を教えるだけだ」といった趣

旨のことを言っている。大学の図書館こそ、自ら学ぶ学生の手助けをしてくれる重要な施設である。しかしその利用率が近年低下していることから、自ら学ぶ方法の指導が充分ではなかったことを反省する必要があるのではないだろうか。

本稿では平成17・18年度と2年間に渡って試みた図書館教育プログラムの開発過程とその結果およびそれらに関する考察を報告する。

「図書館教育プログラム」の開発と実施

1 平成17年度図書館教育プログラムの開発と実施

(1) 図書館教育プログラムの検討過程

図書館委員会において平成17年4月から3回にわたる検討を重ねた後、おおむね以下のような内容が提案された（「図書館を拠点とした教育プログラムについて（17年7月、図書館委員会）」）。1、新しい教育活動の目的（①図書館を自学自習の拠点として整備。②短期大学の導入教育として、情報検索リテラシーと日本語読み書き能力を養う教育プログラムを開発。）2、図書館が教育プログラムを行う理由（①図書館は文献検索を行う専門的施設である。②学生の自学自習の場である図書館としてその教育的役割を積極的に支援。）3、図書館教育プログラムの概要（専任教員からテーマを集め、教員の添削指導を経て完成させる。）4、今後の課題（①教員の負担等諸条件から設定を検討。②添削指導でのポイントをまとめ、手法について整理。③小論文の評価方法について検討。）5、想定している図書館教育プログラムの方向性（①各学科専攻の特色を最大限発揮し、視野の広い学生を養成。②日本語読み書き能力は全学共通の課題であり、1年次の導入教育として重要。③本学の特色を発揮し、他大学との教育的差異化をはかる。④学生と教員の添削指導を通して、小さな規模の大学で実施可能な教育的特徴。⑤図書館教育プログラムの試験的实施を検討。）

その後、各学科専攻での検討を経て、次のような結論に至った。1、総じて賛成なので、実施に向けて作業を進める。2、図書館の技術的な問題、文章表現能力の添削指導について評価

の基準を設けるかなどは、試行実施するなかで検討する。3、単位化するかどうかなどを関連委員会と交渉する必要性があるため、図書館長と各関連委員会委員長との話し合いの場を設ける。4、各学科専攻間の交流を目的とするなど、他大学のプロジェクトとの実施目的の差異化をはかる。

(2) 平成17年度図書館教育プログラムの内容

正式名称を「図書館を拠点とした日本語の読み書き能力を高める教育プログラム（略称：図書館教育プログラム）」とし、対象とする学生を各学科専攻の1年生に限定し任意参加とした。教員の参加も任意とし10月下旬を期限にテーマ募集を行った。その際、「テーマ」、「呼びかけ文」、「キーワード（3～5つ程度）」を記入してもらうことにしたが、内容的には、各教員の専門分野に関連させるテーマでの設定を原則とすることによって、指導の便宜を図ることとした。

なお、スケジュールは、おおむね次のとおりである。10月下旬：教員に対するテーマの募集。11月上旬：学生に対する説明会の実施と参加者の募集。11月中旬：学生参加者へのテーマ振り分けと担当教員からの指導。図書館司書による図書館ガイダンス。12月中旬：テーマに関連する本のリストと小論文及び第1回アンケートの提出。1月上旬：小論文添削結果を返却。2月下旬：学生は添削結果を確認し、第2回アンケートと修正小論文を提出（その後、再度添削評価し返却）。3月：試験的に実施した図書館教育プログラムの問題点・今後の課題を分析し、次年度以降の実施計画を検討する。3～4月：「修了認定書」の交付及び「館長賞」の選考と授与。

図書館委員を全員参加とした結果、最終的に7つ（7名の教員）のテーマで募集することになり、学生には各委員から周知し参加を促すことにした。70名程度を募集目標としたが、参加申し込み者は30名であった。学生には、希望するテーマを第3希望まで記入させたが、全員を第1希望のテーマに振り分けたため、教員が担当する学生数にバラつきが生じる結果となった。

また、実施アンケートを小論文提出の前後に

表3 評価表項目

評価事項	
内容	①課題に相応しい内容か ②引用や参照した資料は適切か ③事実の誤認はないか ④読む人を惹きつける内容か
構成	①論旨に一貫性があるか ②構成が適切か(書き出し・段落・結論) ③引用・注記の仕方は正しいか ④文章量は適当か
文レベルの表現	①誤字・脱字や記号の誤用はないか ②文法上の誤りはないか ③語彙は豊富か ④わかりやすい文章か
文献リスト	①テーマに合った文献を探せたか ②書誌事項は適切か

実施することで、その変化をプログラムの事後分析に反映させることにした。また、図書館ガイダンスの実施を含め、教員学生間でやりとりする書類の提出窓口を図書館に一本化した。なお、添削結果をふまえ、参加学生に「修了認定書」を交付し、優秀者には「館長賞」を授与することで学生への意欲の高揚を促すことにした。

(3) 評価表の開発

提出された小論文を添削し返却する際に、図書館委員会で独自に開発した評価表を添付した。評価表の項目は表3の通りである。この評価表の2回にわたるやりとりによって、到達点を客観的に認識することができた。

各評価事項をそれぞれ「A」「B」「C」の3段階で評価し、総合評価を「AA」「A」「B」「C」の4段階評価とした。その他「コメント」欄を設定し、具体的内容を記入できるように工夫した。なお、添削作業の繰り返しのなかで最終的に「AA」評価へたどりついた学生7名に対して「館長賞」を授与することにし、プログラムを経たうえでの能力向上の過程を重視する評価とした。

(4) 平成17年度図書館教育プログラムの学生アンケート評価

学生参加人数30名に対して最終的に修了認定証を授与された者は16名であった。学生アンケート結果を修了者16名の第1回・第2回アンケートで比較すると(図1)、「文章表現能力の向上」では、期待(第1回93.8%)とおりの成果(第2回68.8%)を得ていることがわかる。また、「資料検索能力の向上」に関しては、期待(第1回6.3%)に比較し、高い成果(第2回56.3%)を実感していることが確認できる。

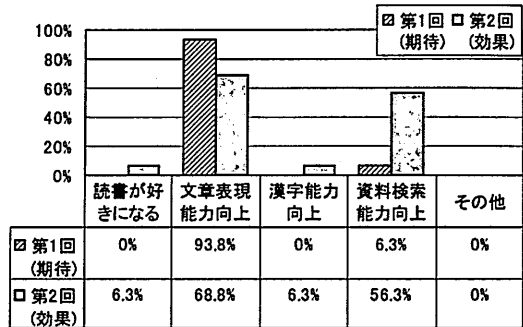


図1 プログラムへの期待と成果

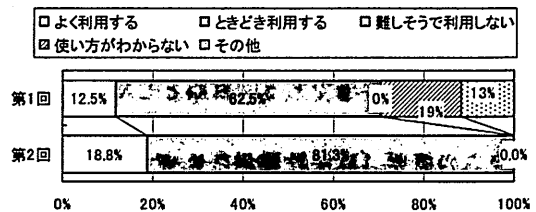


図2 図書館の資料検索(OPAC利用)

「図書館の資料検索利用」に関しては、「よく利用する(第1回12.5%→第2回18.8%)」及び「ときどき利用する(第1回62.5%→第2回81.3%)」の比率が伸びていることがわかる(図2)。プログラムを通して、文章表現能力の向上のみならず、図書館の資料検索利用の促進も促されていることが確認できる。図書館機能を活用しながら学生の文章表現能力を図るという図書館教育プログラムの目的からすれば、一定の成果をあげることができたのではないかと思われる。

平成17年度プログラム修了者のなかには、2年次(平成18年度)の大学編入試験受験時に、

小論文試験対策はもとより、「図書館教育プログラムを積極的に受講した」ことが調査書に記入され推薦されるなど、多方面でメリットが活かされている。

2 平成 18 年度図書館教育プログラムの開発と実施

(1)平成 17 年度の実施を受けてのプログラム改善

平成 18 年度図書館教育プログラムの実施について、平成 17 年度図書館教育プログラムの実施状況や参加学生の様子、アンケート結果、参加教員からの意見等をもとに図書館委員会において検討を重ねた。前述の通り、プログラムへの参加により「資料の探し方がわかった」「文章の書き方がわかった」といった認識を参加学生が得ていることがうかがえる。そこで、平成 18 年度も前年度に引き続き情報検索リテラシーと日本語読み書き能力の向上を目的として、本プログラムを継続することが望ましいとの結論に至った。その際に、学生の現段階の能力にあわせた達成目標の明確化や動機づけを高めるための工夫などより有益なプログラムを開発するために以下の改善を試みることにした。

①プログラムの課題に段階をつけ、各段階でどのような能力の獲得を目標とするのかを明確にする。

「ところでレポートとは何ですか」「レポートとはどうやって書くのですか」入学したての学生だけではなく 2 年生になった学生からもこのような質問を受けることがある。文章能力の未熟さのみならず、自分の意見をまとめるためにはどのような手順が必要でどのような能力を身につける必要があるのかということの理解が曖昧のまま日々課題に取り組んでいる学生の叫びであるように感じる。そこで、本プログラムではまず、レポートや論文を書くための手順を示すべく、学生自身がこの課題に取り組むことで獲得することのできる能力を目標として明らかに示したいと考えた。

具体的には、「紹介文編」「小論文編」の 2 段階の構成とした。第 1 段階の「紹介文編」では、テーマに関連する図書を検索しリストを作成する。そして、その中から 1 冊を選んで読みその

本を紹介する文章（400 字程度）を書くというものである。その上で第 2 段階の「小論文編」へと進むようにした。本プログラムの目的は、前述の通り情報検索リテラシーおよび読み書き能力の向上である。すなわち「探す（調べる）」「読む」「書く」の各能力の向上を目指したものであり、第 1 段階においてはこのうち「探す」「読む」能力を高めることを中心として取り組むことができるよう考えそのように教示した。同時にこの段階においては短い文章に取り組むことで、内容のある文章を書く以前に必要な事項の確認および指導を行うことも意図した。第 2 段階において目標としたのは第 1 段階の 2 つの能力をさらに充実させつつ 3 つ目の目的である「書く」力を向上させることである。この第 2 段階は平成 17 年度プログラムと同様の取り組みであるが、前年度と異なるところは最初の小論文提出の段階において学生が添削を受けるのはすでに 2 度目であるということである。ここで期待される効果については後述する。なお、このような各段階における目標の明確化は、上述のようなレポートに関する疑問を抱えた学生にとってプログラムへ参加する動機を高めることも期待するものである。

②「書く→添削・評価」を複数回行い、学生と教員との接触回数（面接指導回数）を増やす。

①でも述べたとおり、2 段階のプログラムとしたことで添削および教員からの面接指導の回数を増やすことができる。前年度は添削後の面接が 1 回のみであったため（修正小論文は添削・評価表返却のみ）、学生と教員の間でラポールが築けないままに指導が終わってしまったり、基本的な文章力の添削に終始することになってしまい学生が考えた内容に踏み込む余裕がなく教員の専門性が活かされないままに終了してしまったりということがあった。複数回の添削・評価のやりとりおよび面接指導を行うことでこの点を改善することを目指した。また、大学におけるレポート提出は記述試験同様に学生の評価のために課されることも多く、提出し評価されたきりで学生にはフィードバックされないということが往々にしてある。実際、前年度参加学生は自分が書いたものがきちんと添削されて

フィードバックされたことをよかった点として挙げています。このことから、添削の回数を増やすことは学生自身の成果の自覚を高めることにもつながるのではないかと考えています。

③昨年度参加学生（2年生）の協力を仰ぎ、2年生による1年生へのサポート体制を整える。

各学年が過密な講義スケジュールである短期大学においては各々の学年独自の講義や活動に終始することが多く、学年を超えての知識の伝達が難しい。学年を超えたゼミ等において上級生が下級生への指導を行ったり、上級生の業績を見ながら模倣していく中でレポートや論文作成に関する知識を身につけたり、といったことが起こりづらいのである。しかし、このような身近なモデルとの関わりの中で学ぶものは大きいと考えられる。そこで、本プログラムが2年目であることから、前年度の参加学生（そのうち最終的に「AA」評価にたどりついた学生）にプログラム実施にあたっての協力を求めることとした。協力をお願いしたのは以下の3点についてである。1点目は「昨年度参加学生からのお誘い」として参加動機や参加してよかった点をまとめた文章を1年生にむけて発信すること、2点目は前年度の成果である小論文を公開すること、そして3点目は図書館ガイダンスにおける検索指導の補助的役割、である。勧誘の文章は募集要項と同時に配布、小論文の公開は承諾の得られた2名のものを本学図書館のホームページに掲載する形をとった。実際に学生が書いたものを目にすることで、1年生にとって本プログラムがより身近に感じられ、また参加によって得られるものが明確にイメージできることで参加への動機が高まることを期待したのである。検索指導のガイダンスは1年生が実際に2年生と触れ合うことでより身近なモデルから学ぶということのみならず、指導する2年生にとっても自分の知識やスキルを再確認するという効果があると考えた。他者にわかりやすく伝えるためには自分自身がよりその事柄に精通していなければならない。また教えるということによってさらに自分自身のスキルは向上するものだからである。図書館ガイダンスを行う前に2年生向けの事前研修も図書館より行い、この効果をより高めるよう努めた。

(2)平成18年度図書館教育プログラムの内容

平成18年度プログラムのスケジュールは以下のとおりである。平成18年7月18日～8月4日：教員へのテーマの募集。9月1日～8日：学生へのプログラムの周知と参加者の募集。10月6日：学生の応募締め切り。10月10日：学生へのテーマ振り分け（以上、テーマの募集から参加学生の振り分けまで）。10月12日～20日：学生への担当教員の面接指導と図書館ガイダンスの実施。10月30日：本の紹介文とテーマに関連する文献のリスト、および第1回アンケートの提出。11月6日～10日：紹介文と文献リストの添削結果と評価表の返却、および面接指導（以上、「プログラムその1（紹介文編）」）。11月30日：小論文と文献リストの提出。12月11日～15日：小論文と文献リストの添削結果と評価表の返却、および面接指導。12月22日：修正小論文と文献リスト、および第2回アンケートの提出。平成19年1月5日：修正小論文と文献リストの添削結果と評価表の返却（以上、「プログラムその2（小論文編）」）。1月：「修了認定書」の交付及び「館長賞」の選考と授与。

平成18年度プログラムでは、対象とする学生を前年度同様、各学科専攻1年生に限定し任意参加とした。また、本学の特色である専門領域の多様性や学際性を生かし、できるだけ大勢の学生の興味関心に対応する目的から、図書館委員以外の各学科専攻の教員に対しても積極的な参加をお願いした。7月中旬から8月初旬にかけて全学の教員を対象に募集がなされた結果、13名の教員の応募があり、専門分野に関連した15のテーマ・呼びかけ文・キーワードが提出された。提出されたテーマは表4の通りである。各委員より学生に募集要項が配布され、大学の授業や就職活動、社会生活に有益であることなどを説明しつつプログラムへの参加を促した。募集要項には教員のテーマのほか、「昨年度参加学生からのお誘い」が盛り込まれた。その結果、100名の学生の参加申し込みがあった。今年度は学生に希望するテーマを第2希望まで記入させ、なるべく各教員の担当する学生数に隔たりが出ないように振り分けられた。また、図書館ガイダンスの実施、および教員・学生間でやり取りされる指導日程の連絡や書類の

表4 平成18年度 教員指定テーマ

平安朝の女性と文学
私たちの生活と自然災害
「なぜ」から始まる、おもしろい物づくり
現代人が抱える健康問題: 食によるメタボリックシンドロームの予防・改善
働くことについて
なぜ「ボランティア」をするのか
スポーツ活動の経験から学べること
父親の育児へのかかわり
マイノリティを考える
蜷川幸夫演出「ロミオとジュリエット」の劇評
人を殺すことの意味について
身近な科学と技術の歴史
「国」とは何か?
佐渡の能と能舞台の歴史
多民族国家アメリカについて

提出窓口は、前年度同様、図書館に一本化された。

本プログラムの参加に際し、学生は担当教員よりプログラムやテーマについて面接指導を受け、併せて図書館司書による図書館ガイダンスに出席して資料検索の方法を学んだ(ガイダンス出席者:89名)。その際に図書館司書により作成されたオリジナルテキスト「県短生のための情報検索の基礎知識」が用いられ、例題をもとに学生自身がより具体的に学べるよう工夫がなされている。また、この図書館ガイダンスでは、前年度のプログラムに参加した学生から検索方法の指導の協力を得ることが出来た。これらの指導に基づいて、学生は「プログラムその1(紹介文編)」に取り組み、テーマに関連した文献を調べてリストにまとめ、その中から1冊選んで本の紹介文を作成した(紹介文提出者:81名)。続いて「プログラムその2(小論文編)」に進み、各自テーマを絞り込み、再び関連文献を検索し、数冊を読んで小論文を作成した(小論文提出者:58名、修正小論文提出者:52名)。紹介文・小論文・修正小論文の全てについて教員から学生へ添削と評価表によるフィードバックがなされた。また、本プログラムへの参加についての学生へのアンケートが、紹介文と修正小論文の提出時に2回実施された。

(3)実施結果—学生アンケートの分析

当初、参加を申し込んだ学生が100名であったのに対し、本プログラムの最終過程である修正小論文を提出した参加者は52名であった。そこで、ここでは学生アンケートの結果をプログラム修了者52名の第1回・第2回アンケートを比較しながら分析する。但し、うち1名は第2回アンケートを提出していないため、未回答としてこれに含める(以後、二つのアンケートはそれぞれ、第1回、第2回と略記)。

参加者が本プログラムへの参加に期待していたことで最も高い比率を示していたのは、文章を上手に書けるようになることであった(図3)。このことは、本プログラムの目的の一つである日本語の読み書き能力の向上と一致するものであるが、第2回の「日本語能力の向上」に示されるように、参加者の88.5%が一定以上の読み書き能力の向上を実感している(表5)。

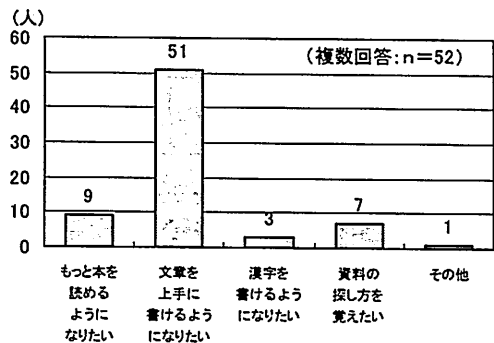


図3 プログラムへの期待

表5 プログラム参加後の日本語の読み書き能力向上認識

大いに向上した	9人 (17.3%)
まあまあ向上した	37人 (71.2%)
あまり向上しなかった	5人 (9.6%)

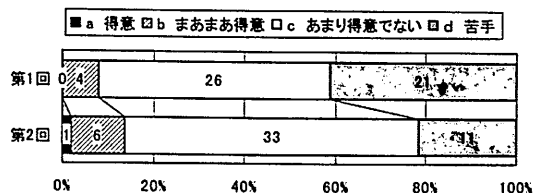


図4 的確な言葉での文章表現 (人)

特に文章表現力の向上についてもその傾向は明らかである。的確な言葉で文章に書き表すことについて、「得意」と答えた学生の伸び率が0.0% (0名) から1.9% (1名) と低い一方、第1回では「あまり得意ではない」の比率が50.0% (26名)、「苦手」が40.4% (21名) であるのに対し、第2回ではそれぞれ、63.5% (33名)、21.2% (11名) となっており「苦手」と感じている学生が半減している(図4)。また、本プログラムに参加してみて、参加者の67.3% (35名) が「文章を書くことが難しかった」とする一方、57.7% (30名) が「文章の書き方がわかった」と答えていることから、繰り返し文章を書くことの実践を通して、ある程度の自信や達成感を得ることのできた学生が少なからずいることがわかる(図5、6)。さらに、自分で書いた小論文に点数をつけてもらったところ、100点を満点として70点以上をつけた比率が28.9% (15名)、60点以上が63.5% (33名) と、6割

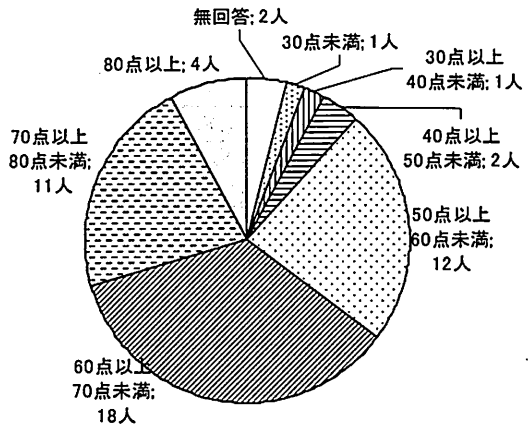


図7 自分で書いた小論文に100点満点で点数をつけると

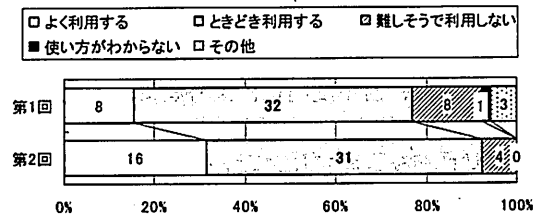


図8 図書館の資料検索 (OPAC) 利用 (人)

以上の参加者がいわゆる「合格点」を付けている点も上記の分析の裏付けとして指摘されよう(図7)。

次に、本プログラムのもう一つの目的である情報検索リテラシーの向上について見てみたい。図8に示されるように、参加者の実に8割近くが本プログラムに参加する以前から図書館の資料検索システム (OPAC) を利用していた。この実態を反映してか、本プログラムに期待する点として資料検索方法の獲得を挙げている参加者は多くない(図3)。ところが、第2回を見てみるとOPACを「よく利用する」としている参加者の比率は30.8% (16名)、「ときどき利用する」は59.6% (31名) で合わせて90.4%を記録し、特に「よく利用する」については2倍の伸び率を示している。加えて、「難しそうで利用しない」と答えた参加者は第1回の半数に減少している(図8)。さらに個別のデータを分析したところ、当初は「使い方がわからない」と答えていた1名もプログラム終了時には「よく利用する」ようになっていること

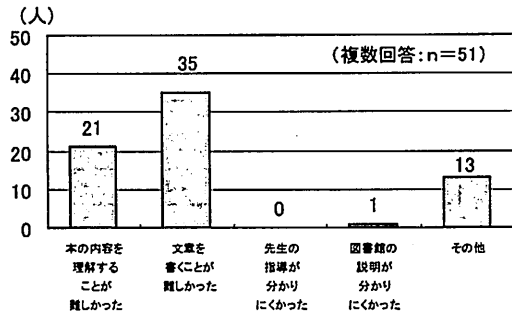


図5 困難だった点・改善希望点

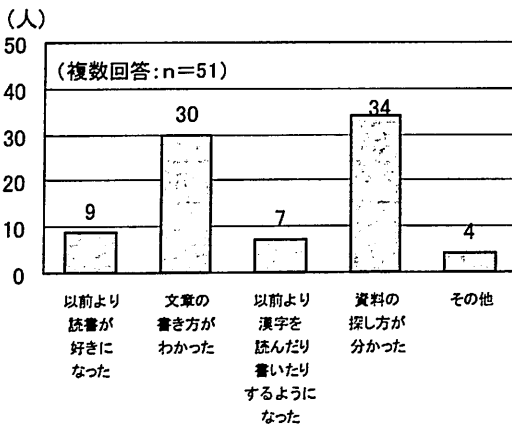


図6 プログラムに参加してよかった点

がわかった。また、本プログラムへの期待値の5倍に相当する65.4%（34名）の参加者が資料の使い方がわかったことをプログラムに参加したことの収穫として挙げている（図6）。これらのことから、学生の多くは本プログラムへの参加以前にはOPACの利用範囲が本学の所蔵図書を検索などにとどまり、論文の検索や横断検索などに及んでいなかったこと、そして資料検索が小論文を作成する上での重要なプロセスであると認識していなかったことの2つの実態が浮かび上がってくる。見方を変えれば、プログラムを通して多くの参加者が、図らずも資料検索の重要性や奥深さを実感したと考えられる。オリジナルのテキストを用いた図書館司書によるガイダンスの工夫、プログラムを2段階に分けてレポート・論文作成で必要な過程を明確化したこと、などの取り組みが功を奏したと考えてよいだろう。

最後に、全体的な読書傾向について指摘しておきたい。「本を読むことが好きですか」の問いについては、「好き」と答えた参加者の数値がもともと高いこともあって特に目立った変化はなく、第2回で4名が「あまり好きでない」から「好き」へと移行した程度にとどまっている（表6）。同様に読書量についても大きな変化はないが、1ヶ月間に本を1冊も「読まない」と回答した学生が11名から4名に減少してい

表6 本を読むことが好きかどうか（人）

	第1回	第2回		
		好き	あまり好きでない	嫌い
好き		33	4	0
あまり好きでない		1	11	0
嫌い		0	0	2

表7 1ヶ月間に読む本の平均冊数（雑誌・漫画を除く）（人）

	第1回	第2回				
		3冊以下	4~6冊	7~9冊	10冊以上	読まない
3冊以下		25	2	0	0	7
4~6冊		6	3	1	0	0
7~9冊		0	0	0	0	0
10冊以上		0	0	0	2	0
読まない		0	0	0	0	4

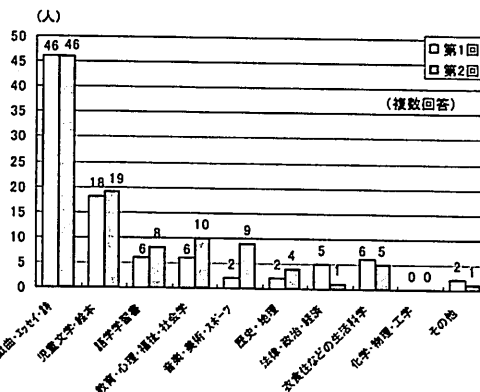


図9 よく読む本のジャンル

る点は注目に値する（表7）。また、読む本のジャンルについては、第1回・第2回ともに「小説・戯曲・エッセイ・詩」と「児童文学・絵本」が上位2位を占めている一方、「教育・心理・福祉・社会学」と「音楽・美術・スポーツ」の比率が伸びている（図9）。このことから、今まで読んだことのないジャンルの本にも手を伸ばしている傾向が学生に認められ、本プログラムが参加者の読書習慣に深みと幅を与えるきっかけとなっていることが指摘される。

(4) 評価表

紹介文・小論文・修正小論文ともすべて添削と同時に評価表を添付した。前年度より評価表を用いる回数が増えたため、学生自身・教員ともに能力の向上過程をより詳細かつ客観的に把握することができ、次の段階へ取り組む際の各自の課題が明確となったと考えられる。評価表は平成17年度プログラムの内容と同様であるが（表3）、紹介文の評価表はその課題の特性に合わせ「内容②③」「構成③」の評価事項を除いた11項目とした。今年度は最終的に「AA」評価にたどりついたものは29名であった。

(5) 平成18年度図書館教育プログラムの全体的考察と今後の課題

本プログラムの効果は上述の通りであるが、この他にも、第2回アンケートの自由記述のよかった点において「他学科の先生の指導を受けることができた」「自分の文章を書くときのくせがわかった」「テーマについて深く考えることができた」などの感想を得ている。学生と教

員との接触回数が前年度よりも増えたことで教員側も個々の学生の特徴やニーズをとらえやすく、またより内容に踏み込んだ指導ができたと感じているが、この点を学生側も認識しているということが明らかになったといえよう。プログラムが目的としている読み書き能力や情報検索リテラシの向上のみならず、テーマへの取り組みも深みを増したということは各領域の専門家が集う高等教育機関にとって重要な観点であろう。また「小論文をもっとやりたかった!」「もっと長い時間で、もう少し多く論文などを書きたかった」という意欲的な意見も見られた。一方で、「期間が短すぎる」「いろいろと重なって時期的に忙しかったので大変だった」「もっと時間が欲しかった」などといった実施期間の短さを指摘する声が多数上がった。夏休み終了後から学生の募集を始めたため、学生が課題に取り組むことができたのは実質3ヶ月程度であった。この短期間でこれだけの量の課題に取り組むことは、他にも沢山の課題を抱えている短期大学生にとって非常に大変なことであった。取り組む学生もまた添削をする教員もとにかく時間に追われる感覚の中で行っていたことは否めない。来年度以降はこの反省点を活かし、より早い時期での開始ができるようスケジュールを調整していく必要がある。

また、この過密なスケジュールであったことにも深く関連していると思われるが、途中放棄者が決して少なくはなかったという事実がある。今回は3回の課題をすべて提出しプログラムを修了できたのは100名の申込者のうち52名であった。申し込みをしたものの初回の課題である紹介文を提出したのは81名であるので、一旦は課題に取り組み始めたものの最後までたどりつけずに放棄してしまったものが29名いたことになる(修了率64.2%)。本プログラムは単位化されたものではないため強制力のないものではあるが、せっかく自ら参加を希望した意欲的な学生を最後まで導けなかったことは反省すべき点である。今後の課題とすべく、81名が提出した紹介文と同時に回収された第1回アンケートの結果(1名未提出のため80名分)を分析し、修了した者(以下修了者)と途中放棄した者(以下放棄者)の結果を比較してみた。

すると、参加動機は両者とも「案内を見て」と自主的な参加が一番多く、「先生に勧められて」という他者からの勧めによる参加はむしろ放棄者群の方が修了者群より少ない(図10)。一方で「本を読むことが好きか」を尋ねた項目で「あまり好きでない・嫌い」と答えた人は修了者群で34.6%、放棄者群で46.4%、と読むことに親しみを感じていない人が放棄者群に多いことがうかがえる(図11)。このことから、本を読むことをあまり面白いと思えず苦手意識をもちつつも自ら何とかしたいと思って参加した学生が、結局時間が少ない中での取り組みとなってしまったことから課題をこなさきれずに放棄してしまった、ということが一つ考えられるように思う。やはり、学生も教員も余裕を持った中で読み書きに親しみをもっていない学生であってもじっくりと時間をかけて指導教員と向き合えるようなスケジュールを組む必要があると考える。

さらに今後の課題として挙げられることは、学生の成果の公表の機会を設けることである。冊子にする、学園祭を利用して発表を行うなど形にして他者に公開することで、より達成感を得られることが予想される。また、このような

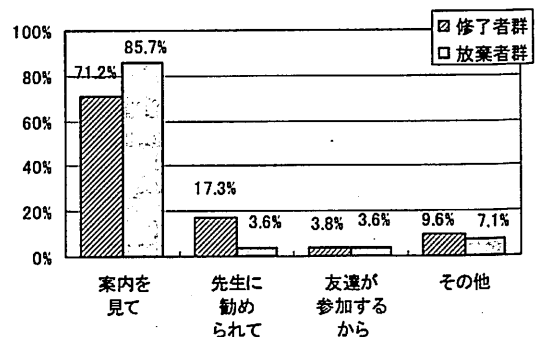


図10 「参加動機」修了者群と放棄者群の比較

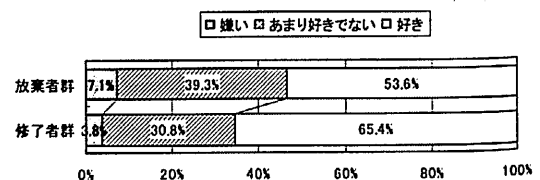


図11 「本を読むことが好きか」修了者群と放棄者群の比較

活動を外に向けて発信する良い機会にもなるであろうし、そのことによって図書館利用への意識向上や次年度へのプログラムへとつながることとなるであろう。

全体的考察

平成17・18年度の2年間実施した図書館教育プログラムの結果が本学図書館利用状況に及ぼした効果を見ると、プログラム実施時期の10～12月の貸出冊数において平成16年のデータを100とした場合、平成17年には79.7と効果が見られなかったが、平成18年には122.8と増えて効果が見られた。また、入館者数は年々減る傾向にあるのだが、プログラム実施時期には例年並みに回復している。このプログラムの効果が実施期間に限って出たと考えてよいだろう。図書館職員の視点から見ても、ガイダンス等を通して直接学生と接することで学生のニーズが明確につかめるようになりサービスの改善に努めることができた。このことに加え、学生がプログラムを通して図書館や司書をより身近なものとして感じることは図書館利用の増加につながることであり、参加学生と図書館の間の距離を縮めたことは本プログラムの効果であると考えられる。しかしながら、1～12月の年間の貸出冊数においては、平成17年が87.1、平成18年が91.3と変わらないことから、今後さらに何らかの対策を立てなければ一般的な傾向として学生の図書館利用が減っていくと考えられる。読書力の低下が教育に悪影響を及ぼすことは自明のことであるから、今回のプログラムの結果を分析してさらに優れたプログラムを作り上げることが必要である。

平成18年度プログラム実施期間の貸出数増という好ましい結果は、学生のプログラム参加者が平成17年度30名から平成18年度100名へと大幅に増えたことによるだろう。この結果はこのプログラムの方向性を指し示してくれる。学生参加者の増加の要因は2つ考えられる。第1に、プログラムも2年目になって、前年の計画の反省をもとに、学生に強くプログラムの内容と意義を伝えることができたこと。ここには参考モデルとなってくれた2年生の協力も大きく影響している。第2に平成18年度には参

加した教員数が前年の7名から13名（テーマ数は15）に増えて、様々な分野のテーマが提出され、学生の関心を高めたことである。今後は指導の負担も考慮に入れつつ教員の参加者を増やし、その上で参加学生数を増やすようにしたらよいだろう。

平成18年度プログラムの今後の課題で述べたように、プログラムの実施時期が3ヶ月間だけというのは、実習などを含む短期大学の過密なカリキュラムを考えれば、短すぎるようだ。また、そもそも読書や資料探索の習慣が身に付くには時間が必要であるから、少なくとも実施期間として6ヶ月間は必要だと思われる。その結果、参考文献を探す学生にも指導する教員にも余裕ができる。このように考えると、この種のプログラムを1年生の前期に単位化して実施することが効果的であると考えられる。その際、学生の知的好奇心をひく導入用の講義や講演なども有効であろう。

この図書館と教育を連携するプログラムの実施自体は過密なスケジュールの中で教職員の見事なチームワークで行われた。小論文の評価項目や評価方法などもよく練られており、学生一人一人に具体的に評価を説明することができた。学科専攻の異なる学生への添削指導日の調整や資料作成なども迅速に行われた。このような手順の迅速さやわかりやすさもプログラムの成功には欠かせないものである。今回のこのプログラムによって得られた結果をぜひとも活かしたいものである。

文献

- (1) 小野博他「日本語リメディアル教育」(『メディア教育研究』第11号、2003)
- (2) 小野博「大学生の基礎学力の低下とりメディアル教育」(『総研ジャーナル』No.88、2006.03)
- (3) 土屋俊「現代日本の大学改革と大学図書館」(逸村裕・竹内比呂也編『変わりゆく大学図書館』第2章、勁草書房2005)

附記

プログラムの実施にあたりご協力いただきました教職員の皆様にご協力いただきまして御礼申し上げます。